

## 特集：古川プロジェクト

### 調査報告

# 矢作川とひとの暮らし

Change of the everyday life in the Yahagi River Basin

古川 彰<sup>1)</sup>・川田 牧人<sup>2)</sup>・芝村 龍太<sup>3)</sup>・小川 都<sup>4)</sup>

Akira FURUKAWA, Makito KAWADA, Ryota SHIBAMURA and Miyako OGAWA

### 要 約

古川プロジェクト人文・環境班は、矢作川の変化および、それと緊密な関係を保ちながらあらわれる、流域の人々の生活の知識と記憶と感情を「ながれ」と表現し、これを解明するための調査研究をおこなった。これは、当プロジェクト全体の目的でもある<矢作川モデル>の構築に、川とひととの関係性や時間的変遷といった視点を取り入れるためである。

1章では、これら調査研究上のキーワードについての若干の理論的背景を整理するとともに、人文・環境班が調査をすすめる上で取ってきた方法論上の視角（歴史的記憶の想起という側面と、生活への評価という側面の二点）を提示した。2章では、調査者自身が聞き取り調査から感じた漁業者の実感を出発点にして、河川漁業者にとっての河川の歴史をおた。従来、河川の歴史と言えば、利水と治水の歴史がその大半をしめていたが、筆者は、ここで取り上げる漁業者の河川史を、治水利水の河川史の裏側と位置づけながら、矢作川漁協と漁業者がアユを媒介として矢作川で取り結んできた関係の変遷をまとめた。3章では、あえて女性に焦点をあて、川辺とひととの関わりを明らかにした。意識されないままに男性と自然との関わりが偏りがちであった調査視点をずらし、日常の暮らしを支えていた彼女らの生活を見ることで、あらためて川とひととの関わりとその変遷を捉え直すためである。4章では、1章で有効性を述べた写真資料提示型調査の可能性の一端を示した。5章では、高度経済成長の結果としての川の汚濁と運動、近代の帰結としての川の疲弊と人々の川離れに対する運動について記述した。

古川プロジェクトでめざしているのは、目立たないゆっくりとした「ながれ」の変化に自覚的になることである。人文・環境班は、調査結果から「ながれ」の重要な位置に住民の感情があることや、その感情が社会的価値観によって大きく変動する様子を捉えた。そして同時に、生活者の言説がその変化を示す資料として十分な情報量を保持していることを提示した。

キーワード：ながれ、アユ、くらし、河川環境運動、資料提示型調査

## 研究概要

### Outlife of the Study

古川プロジェクトの目的は、全体では「ダム直下流域の生態系の単純化・後退の実態を総合的に解明し、生態系復元の事業化にむけた<矢作川モデル>を提起する」ことであるが、一言でいえば「もういちどアユが釣れるようにする」こと、そしてそのための「ながれ」をとりもどすことである。「ながれ」という和語は、矢作川流域の地域特性と歴史的積み重ねが交錯した地点におぼろげながらにたちあらわれる住民の生活感情(民衆心性)であるといってもよかろう。したがって「ながれ」をとりもどすということは、河川の流れそのものを回復するというよりも、流れそのものと緊密に絡み合っ「ながれ」を織りなしているような人々の生活の知識と記憶と感情を立体的に再構成していくことであろうと考えられる。

古川プロジェクト人文・環境班では、このような対象としての「ながれ」を解明していくために、歴史、知識、将来像といったキーワードを設定することとし、それにもとづいて調査研究計画を策定した。1章では、これら調査研究上のキーワードについての若干の理論的背景を整理するとともに、人文環境班が調査をすすめる上で取ってきた方法論上の視角を提示した。

### 古川地区

古川プロジェクトの名称は今回集中的に調査を実施した矢作川左岸豊田市扶桑町にある古川水辺公園周辺の旧地名からとっている。人文・環境班は川とひととの関わりの変遷に焦点をあてていたため、おもに扶桑地区（以

下、古川)の人々から話を伺った。小川の論考はもとより、5章で登場する村山日誌の筆者である村山志郎さんも古川の住人である。

古川(3.川辺の暮らしと環境利用,図1参照)は、明治39年、旧平井村が、旧益富村、旧渋川村、旧野見村、旧寺部村、旧上野山村、旧市木村、旧四谷村の一部と合併して高橋村となり、その後昭和31年に挙母市(昭和26年市制発足)と合併した(昭和34年豊田市に市名変更)。

このあたりは矢作川が山間部から平野部にでるところにあたり、左岸一体は東側がそのまま山の傾斜地となっている。そのため耕地が非常に狭く、自給的な農業さえも右岸の越戸地区などに農地を借りておこなっていた。この耕地の少なさが、住民と矢作川やその堤防部分とのたいへんに多彩な関わりをもたらすことになる。昭和戦前期までは上流から木材や竹を組んで流される筏の集散地としていくつもの貯木場がつくられていた。川の中のアユやウナギ捕りはもちろんのこと、栗石と言われる丸い石の採取、川辺の竹の加工といった収穫や仕事をもたらしていた。こうした多様な川との関わりなしに古川は生活の場として成り立たなかっただろう。

しかし、だからといって古川にとって矢作川は、狭小な耕地からでは不足がちな日々の稼ぎを補うためのモノではなかった。2章で芝村が記すように、川での鮎釣りやウナギ捕りは小さな稼ぎとしての意味以上に楽しみの場として強烈な印象を残している。また川辺は洗い場であり、井戸端会議の場であり、子どもたちの水遊びの場でもあったことは3章の小川の川辺の暮らしと環境利用に詳しく述べられている。だからこそ、1950年代に入って、豊田自動車の工場で働くようになって、川との関わりは絶えることはなかったし、1970年代の川の白濁期には汚染源の摘発に加わりもした。汚濁の川を抜け出した90年代には、彼らは古川水辺公園を中心にした河川環境保護運動に乗り出すのである。

いっけん行き当たりばったりにも見える古川の人々の暮らしは、矢作川との関わりをとおして見るとき、川の

変遷史と不思議なほど同調していることがわかる。もちろん川の民というのではないが、稼ぎとしてだけでなく生活のあらゆる場面で直接・間接に矢作川と関わらざるを得なかった人々の暮らしぶりの、成り行きとしか言いようのない歴史が展開されているのである。そのため人文・環境班では、そうした人々の実践の意味を、可能な限り人々の経験のなかからあぶり出していく方法をとった。その課題と方法について次章で検討しておこう。

## 謝辞

今回のプロジェクトでは多くの方々にお世話になりました。聞き取り調査に快くご協力いただいた扶桑町の皆さまをはじめとして、写真をお貸しくださったOさんご夫妻、Dさん、Aさん、(ご希望によりお名前は伏せました)、平成13年の写真撮影で、30~40年を経て様変わりした川辺を案内していただいた扶桑町の村山秀夫さん、プロジェクトのメンバーになっていただいて、古い写真通りの現況写真撮影に応じてくださった横井恭夫さん(横井写真事務所)、資料に関するご助言・ご協力をいただいた豊田市郷土資料館の伊藤智子さんはじめ職員の皆さま、独立行政法人水産総合研究センターの竹内賢士さん、その他、多くのご協力をいただきました皆さまに、この場を借りてお礼申し上げます。

- 1) 豊田市矢作川研究所研究顧問、関西学院大学社会学部：  
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155
- 2) 中京大学社会学部社会学科：〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立101
- 3) 京都大学大学院文学研究科：〒606-8501 京都市左京区吉田本町
- 4) 豊田市矢作川研究所研究員：〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F